

か特別支援教育が展開しにくいといわれますけれども、私は実は中学校にはやりやすい部分が多いと思っています。というのも、教科担任制には、利点があるからです。9人ないし12人の先生方が一人ひとりの子どもに関わるわけですから、その先生方の中には、きちんと子どもを見つめて、伸ばしてくれる方が必ずいます。たった一人が担任だった小学校より、たくさんの教師の目や手があるのです。状態によっては、いくら担任が一生懸命やっても、子どもと相性が合わない

スライド 12

中学校での特別支援教育 (月森)

- 教科担任制の利点
- 複数の教師の目、相性、変化に富んでいる
- 学年会議で共通理解がしやすく 指導体制が組みやすい
- 担任が情報収集の窓口 (小学校と同じ)
- 他学年との連携がとり易い (学年主任)
- 今までも行われていた生徒指導部での連絡会
- 部活顧問、講師、養護教諭の支援

ということはよくあります。子どもの中にも担任との相性がありますからね。教科担任制であれば、相性の合う先生を見付けることもできますし、子どもにとっては変化に富んでいるので、いろいろな先生方に接して視野が広がっていきます。そして、中学校の場合は、学年会議が非常に頻繁に行われます。このため、共通理解が得られやすく、指導体制が組みやすい、というのが中学校の特徴です。

教科担任制といっても、担任の先生が生徒理解をし、保護者との窓口であることは小学校と同じです。担任の先生を窓口にしなが、学年単位で連携を取って支援していく。他学年の先生方とは、学年主任を中心にお互いに連携を図るわけです。今までどの学校でも行ってきた生活指導部(生徒指導部)での連絡や、校内委員会で全校理解につなげていくこともできます。さらに、部活の顧問だとか、講師の先生、あるいは養護教諭、スクールカウンセラーの支援も交えて、一緒になってやっていくことができると思います。

中学校での支援のポイント 教科の専門性を生かした支援

教科指導の中に発達障害への支援という視点を取り入れるためには、教科の専門性を生かすことが重要です(スライド13参照)。私はぜひ実施してほしいと思っています。いろいろな研修会でよくお話しするんですが、発達障害に関する研修は学校種別ではなく教科ごとにやるのがとても効果的なんです。というのは、中学校の先生方には専門教科のプライドがありますし、教科担任として指導できるという自負があるからです。そこを生かして、国語の先生へは「読む、書く、聞く、話

スライド 13

中学校での特別支援教育 (月森)

- 教科指導に専門性を生かして
発達障害に対する研修は、教科別に行うと効果が高い(国語・数学・英語・体育・美術)
- 思春期は、個別の教育相談が有効的
(一対一の関係になるので)
- 放課後の補習体制が組みやすい(副担任)
- 生徒指導主任がコーディネーターの役割
- スクールカウンセラーにも学習指導を依頼

すという部分でこういう特徴的なつまずきがあって、学習内容を取り込むときにこういう難し